平安朝貴族の風雅趣味

關根正直

平安朝といつても、爰ではおもに醍醐村上兩帝の御世頃から白河鳥羽兩院の頃までの間をいふ。此の間の貴族男女の美術思想風雅趣味に富んで居た事は、實に高度に達して居た。其有樣即ち彼等が平生の生活や、事に臨んで發現した心緒擧動、意匠に巧みで風雅の趣味を嗜んでゐた事を、當時の記錄に徵して大略話さう。

(一) 詩歌に音樂

當時の士女で、先づ第一に詩歌を解せぬ者は、殆んどなかつたといつてもよい。最も詩は白氏文集と、當時代の先輩學匠の作ぐらゐで、而も一般の女子に涉つてではない。寧ろ少數の範圍に限つてであるが、歌は全般に涉つてゐた。日常の挨拶詞同樣に、他人から歌をよみかけられたら、必ず返歌をした。之をせぬのは相手に對して不興である。否失禮になるから、巧拙に拘らず早速返歌をした。これが出來ぬ場合には、側に居る者が代作代辯をしてやつた例もある。日常の談話のうちにも、古歌の詞で應答をした。例へば一條帝の中宮の所へ、兄の伊周内大臣が、雪の日に訪問した。すると中宮の詞に、「道もなしと思うたに、よくこそ」と會釋すれば、伊周公は「あはれともや御覽ずると存じて」と挨拶した。是れは中宮が、先づ

山里は雪ふりつみて道もなし今日こむ人をあはれとは見む（拾遺集にある）

といふ歌の詞で勞うたから、公は直に悟つて矢張同じ歌の下の句の詞であはれともや云々といつた。あなた

が私を道もない雪中に來たあはれ感心と御覽なさらうと思つてと、當意即妙に挨拶したので枕草子に見える。此の類はまだ幾等もある。凡そ當時の士女で、歌道に暗くては、上流の交際は出來ぬ有樣であつた。

次は音樂であるが、是れが又交際上の要件で、男女とも殆んど音樂の嗜みのない者はない。詩會歌會のやうな文學の會のあとですら、管絃合奏の催を行る事は常例であつた。まして花月の宴會、雨雪の徒然には、必ず樂器を弄んで、朗詠郢曲に歡樂を極める。而もそれが他から藝人を呼び寄せるのではない。主客男女各自に、或は琴琵琶、或は笛笙、思ひ〳〵に堪能な藝を演ずるので、熱心家は常に樂器を携へて居た。ちよつと北山へ行く御供にも「例の篳篥ふく隨身、笙のふえ持たせたるすきもの」は源氏物語若紫の卷に見え、横笛懷にしたる搢士等は枕草子にもあり、腰なるえうでう（腰笛）ぬき出して、嵯峨野の月に「ちつと鳴いた」仲國は、平家物語の中にも居た。

(二) 服裝の意匠

服裝には當時の士女の最も意匠を凝らした所で、他人の衣紋にも頗る趣味を持つて居た。衣服の原料たる織り樣、染め樣、紋がら模樣等の發達してゐた事は、蓋し意想外であつたらしい。隨つて織紋模樣染色に尤も注意して、四季の時節に適應する樣にしたが、中ん就く表著の色ばかりでない、裏の色や上下の重ねの配合に心を盡した。一條帝の中宮が、或年の二月十日に、父母と妹に對面するといつて、晴の衣裳をした時、紅梅色の固紋と浮紋との重ね袿の下に、紅の打衣を三枚重ねて、搖取のやうに打掛て著ながら、清少納言にむかつて、「今は紅梅は著でもありぬべし。さけれど蒲黃などのにくければ、紅にはあはぬなり。」と語つてゐるが、紅梅色は、冬の末から春の始までの季節に相應するが、二月中旬からは、櫻蒲黃、また樺櫻、青柳

つゝじ重ねなどを著るべき筈であつたからで、「梅重はもはや時節後れの氣味だが、萠黄色は嫌ひだから、季節後れを承知で、今日は紅梅を著た」と斷られたのである。來賓たる妹の君は、又紅梅重の小袖の、下の方は薄く、上を次第に濃くして、其の上に濃い紅の綾の打衣、少し赤い蘇芳の織紋の袿に、萠黄の固紋の唐衣を著たとあるは、前にいふ青柳重であらう。これは枕草子にあるが、こんな風に必ず季節の花の色、模樣がらを選んで著るのが例である。源氏物語の末つむ花の卷に、「昔物語にも御裝束をこそまづはいひためれ」とかいてある通り、作り物語などには、一々細かに衣裝の色目を寫してゐる。殆んど擧げるに暇ない。榮花物語の若枝の卷に、三條院の皇后琵琶殿が、公卿を招待して、饗宴を催された時の官女たちの裝を書いて、

衣のつま重なりて(簾ノ中カラ)打出したるは、色々の錦を枕の雙紙に作りて、打置きたらむやうなり。重なりたる程、一尺餘りばかりに見えたり。あさましうおどろ〳〵しう(呆レタ仰山ナ)袖口のまろび出でたる程、火桶のさゝやかならむを据ゑたらんと見えたり。(中略)この女房のなりどもは、柳、櫻、山吹、紅梅、萠黄の五色を取り交しつゝ、一人に三色づゝを著させ給へる也けり。一人は一色を五つ、三色著たるは十五づつ、あるは六つ宛、七つ宛、多く著たるは十八、二十にてぞありける。あるは唐綾を著たるもあり、或は織物、固紋、浮紋など、色々に從ひつゝぞ著たんめる。上著は五重などにしたり、(之ヲ見タル)殿原あさましう目もあやにて、迭に御目を見交してあきれ給へり。

とあるのは極端に至つたので、かうなると意匠や趣味といふより、唯豪奢に流れた迄であるが、次の例の如きは、矢張風流趣味の意匠から出たのである。それは今鏡の白河の花の宴といふ段にある一話で、鳥羽院が待賢門院と御同列で、花見に御幸のあつた時、御供の女房たちまでの出立を書いて、先づ門院の御衣裳には

御車の後に皆紅の十ばかりなる(衣ノ裾)を出されて、紅の打衣、櫻萠黄の上著、赤色の唐衣、白銀こがねをのべて、窠の紋におかれて、地摺の裳にも金をのべて、洲濱鶴龜をしたるに、上刺は玉を貫きて飾られ侍りし。

とあるのは、三月の事だから櫻萠黄の上著を著られたのであるが、此の外、裳の腰は織物であるべきを、金銀の薄金を、窠の紋に打ちぬいて、織出模樣のかはりに縫ひ付け、又裳の洲濱も、常は青く模樣を摺り込みにすべきを、殊更金銀で其形を造つて綴ぢ付けられたのである。又御供の女房たちの方は、

あるは五つ匂ひにて、紫・紅・萠黄・山吹・蘇芳二十五重ねたるに、打衣・上著・裳・唐衣・皆金をのべて、紋におかれ侍りけり。或は柳櫻(ノ色ノ上着ヲ)ませ重ねて、裳の腰には錦に玉を貫きて、(古今集ノ淺ミドリ糸ヨリカケテ白露ヲ)玉にもぬける春の柳かといふ歌、(マタ見ワタセバ)柳櫻をこきまぜて(都ゾ春ノ錦ナリケル)といふ歌の心なり。裳は葡萄染を地にて、海浦を結びて(刺繍ノコト)月の宿りたる樣に、鏡を下にすかして、(古今ニ年ヲ經テ)花の鏡となる水は(チリカヽルヲヤ曇ルト云フラン)とせられたり。(マタ)唐衣には日を出だして(燒カズトモ草ハモエナン春日野ヲ)たゞ春の日にまかせたらなむといふ歌の心なり。あるは唐衣に錦をして、櫻の花を付けて、うすき綿を淺葱に染めて、上に曳きて(拾遺集ノ淺綠)野邊の霞はつゝめども(コボレテ匂フ櫻花カナ)といふ歌の心なり。

とかう書いてある、最後の「野邊の霞はの」意匠は、白河院の第七皇子覺快法親王の母君の考案だとさへ書き添へてあつて、悉く事實である。

爰に至つては、服色の配合だけでは滿足せぬ。葦手歌繪を織紋模樣に應用したもので、近日白木屋吳服店

で、古歌を題材にした裾模様の圖案を陳列したと聞いたが、歌を圖案化したものは、當時に始まつたものであらう。それから又袿を十八枚から二十、二十五枚までも著るやうになつたのは、面白い趣味、高尚な意匠とも云へぬ、實は馬鹿々々しい流行で、事實だから序に申すが、二十枚の上衣を著て立ち得なかつた話は榮花物語に見え、こんな姿で立働の容易に出來ないのを嘲つて、「這ひ伏し」と綽名した事も、枕草子にある。

女のみではない。男子も當時の人は、一般に服裝に物好をした。其の一例は、一條帝の時、關白道隆が積善寺を建てゝ、供養會をするといつて、女院や中宮やを御請待した。此の時中宮太夫であつた道長（後の御堂關白）が、先づ女院の御所へ御迎へに參つて、供奉し來つて、更に中宮の御供をして、寺へ行かうといふ時、前に女院の御供の時著た同じ服裝で、又中宮の御供をしては、人目がわるいといつて、正服は四位以上黑色に定まつた法規ある事ゆゑ、之を替へる事が出來ぬから、下襲を更に仕立てゝ、女院の御供の時と、中宮の御供の時と、別に著替へた。いかにも好事優雅な振舞だと、中宮も清少納言に賞美して語られた事が、是も枕草子にある。是れは後に「一日晴の下襲」と稱して、儀式などのある日、一日を限つて正服束帶の下襲だけを、本人の好みに任せ、美麗にして着る風の行はれた始であらう。

又同じ時代の中將齊信に、清少納言が對話して、後其の服裝をよく見て書いた文に、

櫻の直衣（表白裏赤）いみじう花々と、裏の色つやなどえもいはずきよら（美麗ナコト）なるに、葡萄染（經糸ハ紅緯糸ハ紫ノ織物）のいと濃き（色ノ）さしぬき（ノ袴）に、藤の（花ノ）折枝ことゞ〳〵しく織りみだり（チラシ）て、紅の（出衣）ノ色、打目（光澤）など、輝くばかりぞ見ゆる。次第に白き（紫ノ）薄色など（ノ小袖）あまた重なりたる、誠に繪にかき、物語のめでたき事に云ひたる、是れにこそはと見えたる。

いかにも繪のやうであつたらう。是れら皆想像でも小說の誇張でもない。清少が實見の記述である。

（三）殿室の裝飾

かやうな服裝をした男女等が、日常住んでゐた家屋の狀はどんなであつたらう。其の頃京家搢紳の殿舍は大かた一定の制があつて、身分によつて地域を占めるにも廣狹の法度がある程で、何人の家も構造にはあまり異りがない。中央の寢殿は七間四面で、檜皮葺の屋根に丸木の柱、勾欄付の縁側を四方に取まはし、左右と後とに對屋といふがあつて、渡廊を以て通路としてある。それから東西に長く廻廊を以て前庭を圍ひ、渡廊の下から遣水を流して池に湛へ、其の上に釣殿泉殿を雙方に架して、廻廊の眞中を中門とする。

惣體白木造りに、黑塗の格子を釣りあげ、青竹の御簾には深紅の總を垂れた釣り鈎が下げてある。是れだけには別に意匠の用ひやうも趣味もあらはれもないが、それでも禁中の清涼殿は、孫廂をさし出して、わざと板葺に造られてゐた。檜皮葺では時雨の音が聞えぬから、孫廂だけを板葺にして、時雨の音を聞こし召さんためだと、海人藻芥といふ書にある。禁中は幾たび燒けても、元の御規模に造り給ふのであるから、殊に變化はない、其の俤の一小部分は、今も京都皇宮の中にある。花山院は家作の單調を破り給うて、寢殿や對舍を作り續けるやうに仕出され、車宿などにも、新意匠の造作を遊ばされたと大鏡に見えるが、一般の事でないから略する。

室內は如何といふに、是れにほゞ一定の裝飾があつて、御簾の裏に几帳を立て、母屋と廂の間（客間）の界には壁代といつて、白絹に紫で朽木形などを染めた、幕やうのものを張りわたし、一布ごとに黑赤つやゝかな紐を垂れて、簾を卷く時には、薄い板を心に入れて之をも卷き上げる。客を請ずる時には、二階棚に鏡

臺●香匣●硯箱などを飾りおく作法もあるし、屏風の立てやう、疊の敷きやうにも規則がある。而して此屏風は何事か儀式の時は、必ず新調する例であつた。六枚折、乃至八枚折にして、絹綾の類で張り、一枚毎に、下の方に繪をかいて、上部の色紙形には、時の學匠歌仙能書家にたのんで、詩歌の題をかゝせる。業平が「からくれないに水括るとは」とよんだのも、龍田川に紅葉のちり浮かんでゐる畫に賛した歌、また源公忠が

行きやらで山路くらしつ子規いま一聲のきかまほしさに

とよんだ歌も、山路の旅人が子規を聞きゐる圖に題したので、醍醐帝の第四皇女の裳着の御祝の時に、新調された屏風の歌である。此外衝立襖障子（今の唐紙）には、好みの繪が畫かれてあり、貴女の側に必ず立てる几帳にも織文染色に心を盡してあるから、楊梅桃李の評語は、あながち服飾ばかりでなく、室内の形容詞とする事も出來よう。簾外に瓶をすゑて、四季折々の花の枝を挿し、柱にかけた藥玉にも、趣味の程は見えたであらう。

（四）庭園の風情

寢殿の前庭には、汐入の池水を湛へる事を、前に陳べたが、池中に中島を築くも、作庭上の約束で、庭園の事を島と稱したのも其の故である。それには岩をたゝんで瀧水を落すもある。隨つて水石磯巖の布置などには中々注意して遠方から巖石を運んで來た。仁明帝の第四皇子、禪師の親王の山科の宮には、瀧を落し水を走らせて、面白く作られた庭に、業平が紀州の千里の濱の磯石で、形の良いのを献上した話が、伊勢物語にある。又此の石を立てるのも、多くは畫師の意匠をかりたと見えて、今昔物語に百濟の川成が瀧殿の石を立てたとあり、嵯峨の大覺寺の庭には、巨勢の金岡の立てた石が、後まで殘つてゐて、之を見た西行法師が

庭の石に目につる人もなからましかどあるさまに立てしおかずば

とよんだ歌が山家集に出てゐる。

花のない季節に、賓客などを請ずる場合には、喬木に總體造花を附けた事もある、西宮左大臣高明が正月の大饗の時、池の中島のいと高き松が枝に、ひまなく藤の造花をかけたのが池波に映じて壯觀であつたと、宇治拾遺物語にあるし、中關白道隆が積善寺供養の日、我が女の一條帝の中宮を請待して、其の居所にあてた殿の階前には、櫻の造花を樹ゑられた事が、枕の草子にある。時は二月の初であつたから、最初梅かと思つたら、一丈餘りの樹に櫻の造花を附けて、花の色つやなども、眞花の咲いたのに劣らないといつて、清女は其の技巧を褒てゐる。是れに就いて當世人の心意氣の行き屆いた所が、枕草子に書いてある。それはまづ造り花を見せて人を驚かした上に、其の夜雨が降つた所から、曉方中宮の未だ起き給はぬ前に、舍人をやつて、其大木を根から掘り取らせた事である。折角美しく見せた造花が雨の爲に濡れて、枝や幹などにまつはり附いては、色も興もさめるから、造り花の成る果の、きたない姿を見せまいとした關白の心意氣を、清少納言も感服して書いておかれた。

是等は一時の技工であるが、普通の山水庭で滿足せず、やゝ大規模の作庭を企てた者もあつた。小倉百人一首でお馴染の河原の左大臣源融は、京の六條の私第に、陸奥の鹽がまの浦の景色を摸した庭を作つて、難波からわざ〳〵潮水を運んで池にたゝへ、海人の潮汲み、藻しほやく景趣を學ばせたといひ、大中臣輔親は七條南室町の東に、丹後の天の橋立の景をうつして造らせ、池の中島を遙かに遠くさし出して、次第に長く小松を植ゑたと十訓抄に見える。

山水庭の出來にくい場所や、廣からぬ中庭などでは、「前栽」といつて、花壇やうの物を拵へ、竹のませ垣をゆうて、草花をいろ〳〵植ゑませ、是れに秋ならば蟲を放つて鳴かせたり、露を置かせて月影をうつしたりしても趣味を添へる。一條帝の中宮が兄君內大臣の配流されたについて、宮中にも居り憚り、遠慮して小二條といふ御殿に佗住居をしてゐられた時、左中將齊信が訪問した有樣を語る言葉に、

今日は宮に參りたるに、いみじう物こそ哀れなりつれ。（御傍ノ）女房の裝束、裳唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしうても候かな。御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て、黃朽葉の唐衣薄色の裳、紫苑、萩など（ノ服裝シテ）をかしう居なみたるかな。御前（庭）の草のいと高きを、「なとが是は茂りて侍る。掃はせてこそ」と云ひつれば、「露を置かせて御覽ぜんとて、殊更に」（中宮ノ斯クシテオカレル）と宰相の君の、應へつるなり。をかしう（風流ニ）思えつるかな。

と枕草子に書いてある。此の中宮は御性質溫雅優美で、文學に深くいらしつたから、何事にも趣味のある物語が淸少納言の記文に多く見える、さすが御謹愼中わびつゝ暮らし給ふなかでも、侍女の用意といひ、是れだけの風雅は棄て給はぬ所、當代女性の意氣見るべしでないか。尋常の月見花見は誰れもする、掃はぬ庭の草に置く露をあはれぶ情趣は、わび人に似つかはしいではないか。

（五）郊外の逍遙

此の殿舍に住み、此の庭園をながめて、花に月に、歌を詠じて興を催す事は云ふに及ばず、賓客を招じては、龍頭鷁首を刻み付け丹靑を彩つた舟を池に浮べ、樂人を乘せ奏樂舞踏をさせて、主客見物した事も紫式部の日記や、假作小說ながら源氏物語中に幾ヶ所もあるから、實際貴族の間に行はれた事が知れる。すべて

花郭公月雪の爲に、名勝景地に出遊する事も、珍らしくない。醐醍天皇が大堰川の行幸のさまは紀貫之の序文に書かれ、御堂關白が同所の逍遙には、和歌の船・作詞の船・管絃の船の三部を設けて、來賓に勝手に我が好む船に乘らしめ、得意の藝術をなさしめたと、大鏡古今著聞集等にあつて、殊に名高い。又白河院が法勝寺の花見に御幸の時は、折から滿開で

御寺の花、雪のあしたなどのやうに、咲き連りたる上に、わざと豫て外の（花）をも散らして、庭に敷かれたりけるにや、（御車ヲ引ク）牛の蹄もかくれ、車の（轍ノ）跡も入る程につもりたるに、花の梢も雪の盛りに降るやうにぞ侍りける。

と今鏡に見える。かういふ風に花紅葉を見ても花紅葉その物よりは、別に何物かの風情を添へて、趣味を深からしめる。中には餘り風流がつて、却つて滑稽奇異に陷つた話もある。撰集抄に、

昔殿上のをのこども花見んとて、東山におはしましけるに、俄に心なき雨ふりて、人々騷ぎあひ給へりけるに、實方の中將いとさわがず、（櫻ノ）木の下に立ちよりて、

櫻がり雨はふりきぬ同じくは濡るとも花の陰にかくれむ

とよみて、かくれ（避ケ）給はざりければ、花より洩るゝ雨にさながら潤ひて、裝束しぼりかね侍り。此の事興ある事に人々思ひ合ひけり。又の日齊信中納言、主上にかゝる面白き事の侍りしと、奏せらるゝに、行成その時、藏人ノ頭にておはしけるが、「歌は面白し。實方はをこなり」と（評し）のたまひけり。

とあるが、いかにも行成のいふやうに、馬鹿らしい振舞だ。風雅が趣味も、こゝに至つては、少々八笑人式の笑話に成りすぎた。

（六）競技の嗜み

郊外まで出遊するのは、勿論男子であるが、女子は又室内に在つて、いろ〳〵の競技に耽つた。それは先づ歌合●繪合から、扇合●雙紙合●撫子合●菖蒲の根合などをして、寄り合ては其の巧拙や意匠の深淺を競うて樂しむ。唯に歌の秀でたり繪のすぐれたなどといふばかりでなく、歌を書く紙の重ねの色や、扇●雙紙などなら、それらを載せる臺、即ち洲濱（すはま）といふ器具にまで、種々趣向を施し、意匠の眼を盡すのである。中にも薫物合（たきものあはせ）などになつては、薫香藥の配劑調合の如何によつて、其の香をりの優劣を競ふのだが、目で見たり耳で聞いたりする外に、趣味が鼻にまで及んでゐるとは、何と進んだものではないが。まだ〳〵此樣の類は幾らもあるが、餘り長くなるから、此の位で止めて置かう。

要するに、平安朝貴族の男女は、如上のたしなみ色々の素養があつて、趣味を解し風雅の心に富んでゐた。今の流行語でいふと、全く趣味に生きてゐた人達であらう。

Wise and Otherwise.

Friend (to professor, whose lecture, "How to Stop the war," has just concluded): "Congratulate you, old man-went splendidly. at one time I was rather anxious for you." Professor: "Thanks, but I don't know why you should have been concerned for me."

Friend: "Well, a rumor did go round the room that the war would be over before your lecture."

(Punch.)

倭繪（ヤマトエ）につきて

下村三四吉

本誌編輯の係の方から繪畫に關係した寄稿を願ひたいとの依頼があつたが、私は美術上の事には極めて不案内であるから、別に思はしい題目もない。但、近來我が國の繪畫界に古畫の描法を活用する傾向が段々現はれて、倭繪や南畫中などの手法を攝取消化した優秀な作品も出來るやうになつたのに因んで、こゝには倭繪を歴史上から見て、その起原●發達●特質及び沿革の概略について記して見たいと思ふ。然し、特に研究をしたといふほどの事もないから、固より精細を悉すこともできず、また何等の創見●新説もなく、たゞ斯道先覺の所説の一斑を紹介するに過ぎぬ。我が國の繪畫の沿革を知る上に幾分にても參考となるならば仕合である。

（一）唐風の日本化

推古時代以後、我が國藝術の目覺しい發達は、主として支那藝術の感化によるので、多くは其模倣に過ぎなかつた事は、今更ことゞ〳〵しく述べる必要もない。たゞ藝術のみに止まらず、一體に支那文化の模倣は、平安時代の初期までは絶えず行はれた。然るに、遣唐史廢止以後に及んでは、文化の趨向も追々と變化する氣運を生じた。即ち、從來唐朝から盛んに輸入せられた諸般の事物は次第に我が國人に咀嚼消化せられ、彼れの模倣のみに甘んぜずして、一種の國風を化成し獨造の發展を遂げるやうになつたのである。奈良時代の